

私にメロい瀬名さん
は、重い独占
欲を隠して、私に
わからせてくる

王道！中条目線

【はじめに】

この話は並行世界で瀬名に攻略される私が変わる話です。

男女目線があります。sampleは中条目線のみです。

同じ会社、同じメンバーなのに、誰をヒロインにするかでこれほど世界と男の豹変ぶりが変わるのか！という味変を楽しめる話です！

製品版のラストには**衝撃的な展開**が待っています！

人物紹介

※登場人物は全員**18歳**以上です。

瀬名斗真(せな とうま)

180cm。25歳のかなりのイケメン。

〇〇に惚れ込んでいる。

攻略対象が変わる事によって性格が変わっていく。

登場人物の女性社員は、全員瀬名の先輩。

中条真由美(なかじょう まゆみ)

155cm。佐藤と瀬名の同僚の年下の穏やかで可愛い女の子の先輩。

性格も良くて、瀬名と仲が良い。周りに合わせる可愛い系美女。

見るからに可愛くて男性にチャホヤされるので、性格がいいのに、学生のためあまり仕事に入れず、仕事ができないので、虐められやすいが前向きに生きている健気な女の子。

朝比奈詩織（あさひな しおり）

170cm。25歳。瀬名の元クラスメイト。瀬名の親友。

明るくて前向きな美人系美女。仕事がバリバリできるキャリアウーマンだが、それ故に仕事を押し付けられやすいが、イライラしながらも文句を言わずにこなす姉御肌。

佐藤綾女（さとう あやめ）

160cm。30歳の処女。女として終わったと
思っていて焦っている。

自分に自信がなくて美人なのを眼鏡や無造作な髪型で隠してる美女。

地味なので女性からは攻撃されない美女。

「ねえ、彼氏とは別れたんじゃないの？」

「あ、あれは、無理矢理！」

「でも、嬉しかったんじゃないの？また戻ってきてくれて。」

私は元カレを引きずっていた。

その事を瀬名さんにも話していて、本当は別れたくなかったとか、言っていた。でも、また再開した事によってもう本当に彼の心は私にはないとハッキリと分かってしまった。

「忘れさせてあげようか？」

重く誘惑するような声。優しく目元が鋭く私を射抜いてくる。

獲物を狙う獣の目だった。

中条目線

佐藤さんと話してみると、とてもいい人で、見た目から大人しい人なのかな？と思っていたのに、思っていたよりも陽気で、アニメキャラが好きな人で、話をしてて楽しい人だった。

私もアニメは見るけど、普通に流れてきたら面白いなあと眺めているだけだったので、ここまで熱中できて、推しとかもいる佐藤さんの熱意が羨ましく思えた。

なんか、好きな物がある人って眩しいなあと、特に趣味とかもない私は、佐藤さんって良いなあと笑みを向けた。

私もなにか趣味作ろうかな？

「なんか、中条さんってニコニコして話を聞いてくれるから凄い話しやすいね！」

あ、なんか、オタクな話ばかりしちゃってごめんね！と言ってくるので、私は首を振った。

「逆に羨ましいですよ！そんなに熱中できるものがあるって！楽しいんだろうなあって、キラキラした目をしてる佐藤さんを見てると、こっちまで楽しくなります！」

「えー、やだ！ そうかなあ？」

佐藤さんって年上だけど、可愛い人だなあ。これは瀬名さんが惚れるのわかる。

「ねえ！ 真由美ちゃん彼氏と別れたんだって？」

男性社員が話しかけてきた。

「あ、はい。...忙しくしてたらちょっと」

無神経な人だなあと思いながらも、溜め息を吐いた。

こういう人は苦手だ。

「じゃあさ、俺なんてどう？」

（え？...普通に嫌なんだけど。でも、こんな事率直に言ったら駄目だよな？どう断ったらいいのかな？）

「はいはい！ ○○さん仕事はまだ残ってますよ！ 休憩はこのぐらいで！」

「あ、朝比奈ちゃん。...もうそんな時間かよ。」

まあ、考えといてよ。と言われたので、苦笑いを返した。

朝比奈は勿論、佐藤さんも7、8年の経験からバリバリ仕事をこなしてるからなあ。

昔から、男子からチャホヤされるから、何かと陰口を叩く人達はいたけど、社会人になってもいるんだなあと溜め息を吐いた。

（私も佐藤さんみたいに分厚めの眼鏡かけて隠せば見つからないのかな？）

...いや、私の場合、仕事ができないからただ叩かれるだけになるだけかな？

私は中条真由美、この会社に10月という中途半端な時期から入ってきた。

そんな私は、仕事が忙しくて、彼氏に会えない事が増えて、フラれてしまった。

落ち込んだけど、もう仕事に生きる！と誓っていた。

そんな時に出会った瀬名斗真さん。

一つ年上の後輩というちょっと特殊なポジションの男性だった。

瀬名さんは性格が良かった。周りを良く見ていて、助けていたので、男女問わず人気があった。

でも、過去に傷のある私は、特に関わるような間柄でもなかったので、挨拶だけする関係だった。

瀬名さんは、お世話係の佐藤さんと良く一緒にいるのを見る。佐藤さんは地味なんて言われてるけど、隠れ美人だった。

無造作に低い位置で束ねられた髪、顔を隠す眼鏡。でも、眼鏡の奥の目が綺麗だった。普通に美人だよな？なんで気付かないのかな？

逆に美人なのに、それを隠してるのって漫画のヒロインみたいで滅茶苦茶格好いい！！と思っていた。

推す！！

私は昔、イケメンのクラスメイトに告白されて、断った事から女子から総スカンを食らった事があった。

「あー、やだやだ！顔が可愛くて、いつもニコニコしてたら、イケメンが寄ってきますってか？は！嫌味かよ！」

クラスのリーダーの女の子に嫌われてしまったので、いつも一緒にいた女の子達は何となく私から離れていって、孤立してしまった。

だから、またイケメンに好かれたらあんな目に！とイケメン怖い！と思っていた。

かと言って、何も悪くない人に素っ気なくする事も私にはできなかった。

なので、程良い距離を保った。

「瀬名くんちょっと仕事覚えるの遅いタイプみたいなんだよね。年が近い中条が教えた方が早いのかもしれないな。」

「え？でも、まだ私もそんな人に教えるほどは。」

「ん？だめか？」

「あ、いいえ」

上司が困っているのを見て、この人にはお世話になったから、何か手伝えることがあるなら！という気持ちになっていた。

「あ、あの有難うございます！」

この先輩って確か、明るくて前向きな姉御肌の仕事バリバリ出来る頼れるお姉さんの朝比奈さんだよね！！格好いい！！

「あー、良いつて！なんか、困ってるのかなあ
と思ってコッチが勝手に割り込んだだけだからさ！

でも、断るならバツサリと言わないと駄目だよ。ああいうのはしつこいからさ。」

うちの会社の女性って頼もしい女性が多くて
良いよね！

と思っていたけど、そうでもなかった。

「真由美ちゃんはどう思う？」

「真由美ちゃんって本当に可愛いよね♡」

「若いしね！」

「あ、あはは」

男性社員から顔を褒められるのは慣れてるけど、男性社員からチャホヤされると、女性社員からはあからさまに陰口を叩かれた。

仕事が早いわけでもミスが少ない訳でもない、学校があるゆえに、仕事優先にできない私は、仕事ができず、一部の女性社員からは疎まれていた。

佐藤さんもよく瀬名さんの方を見てるから、両思いなのでは！！とドキドキしていた。

私は守ってあげたくなるタイプとよく言われるけど、本当は尽くしたいタイプで、じれったい2人のキューピッドをしたくて仕方がなかった。

それは、2人がいい人だったのもあった。

「マジで中条って男に媚び売ってるよね？」

「あ、それ私も思ってた。」

それを聞いて、喉がヒュツとなった。

またあの時の光景が思い浮かんだ。

「そういう陰口は叩かないほうが良いよ？ 自分が汚れちゃうからさ。」

朝比奈さん？

「え？ あー、ごめん。朝比奈さん」

ここからはエロの導入です。
エロに集中してもらうために、
変な仕掛けはなしです。

「おはようございます。今日もよろしく願いします。」

瀬名さんから挨拶してくれるようになった。
笑いかけてくれるようになった。

「俺、仕事で褒めてもらえることが多くなって。
誰のおかげかわかりますか？」

なんて、少し遠回し気味に意地悪に言うてくる。

「わ、私も瀬名さんのお陰で仕事がより捗っているんで、そう言ってもらえると私も嬉しいです！」

褒められるのも人に感謝されるのも必要とされてるみたいで嬉しいな。

「...うん」

...あれ？なんか、瀬名さん今日、変。
暫し沈黙が落ちた。

「...元カレと寄りを戻したって聞いたんですけど、本当ですか？」

え？！と肩を上げてしまう。

「え？な、なんで「やっぱり本当なんですね。」」

いや、違う違う！話聞いて！
元カレと確かに会ってたけど、何もないから！

...でも、瀬名さんにそんな事話して、何になるんだろうか？

先輩と後輩の関係なだけなのに。

「渡さねえ。」

「...え？」

.....

...急に押し倒された。...え？ど、どういう事！？

「...付き合ってたなら経験ありますよね？」

え？あ、ちょっと！！

服に手をかけてきて、脱がされる。私は混乱してて、押し返そうとするのに、ピクリともしない。

「してたら...だけされるんだろ？貴方が言ってた事だろ？」

え？そんな事、...言ったなあ。

私はセックスにトラウマがあった。
中の気持ち良さがわからなくて、痛いとは思
った事がない。

瀬名さんのことは気になっているけど、好き
なのかもよく分からない。

そんな人とセックスしても良いのかな？

「...大丈夫ですよ？優しくしますから。」

さっきみたいな獣を狙うような目から急に穏
やかな顔になった。

...良いのかな？自問自答して、気持ちが定
まる前に、私はコクコクと肯定していた。

瀬名さんの情熱的な燃えるような目に、胸の
奥が甘く疼くような感覚に囚われてしまっ
ていたからだ。

...私ってこんなに人に求められた事があった
だろうか？

噛みつくようにして、キスされた。強引に口を
割られて、息もできないぐらいに激しく口の中
を荒らされる。

強引なのなんて嫌なのに、瀬名さんにされると
蜜のように甘い戦慄が走った。

でも、冷静になって思う。

キャラ違くない！？息できない！！

苦しくて引き離そうとするのに、頭に手を持っ
てこられていて逃げられなくて、されるがまま
になっていた。

舌が口の中を好き勝手に暴れて、強引に舌を絡め取られる。

な、なんで、こんな急に！！
私なにかしたの！！

ようやく離してくれて、ぷはっ！！と息を吸った。はぁはぁと呼吸を繰り返す。

「...経験あるくせに、キスで息できなくなるの？...可愛いじゃん？」

この読み進める毎に、読み進みにくくなっていく文章は何なのだろうか？
その違和感が解消されるのは、購入後になります！

面白いと思ってもらえたならご購入をご検討頂けると幸いです！！

ラストは**衝撃的**な展開となります。

製品版はさらに一万文字文章が足されています。

最初から違う整えられた文章の違いをご確認下さい！

王道に飽きてる作者が書く、
捻りの入った王道！